

# 中国人学習者の日本語受身文の誤用研究

(要旨)

広島大学大学院文学研究科

博士課程後期人文学専攻

学生番号： D134851

氏 名： 史 兆紅

本研究は、第二言語習得(日本語学習)における中間言語の一部である誤用について、『YUK タグ付き中国語話者日本語学習者作文コーパス』Ver. 3 から抽出した日本語受身誤用文データを対象に、中国人学習者の日本語受身文の誤用実態を調査した。研究の目的は、対照分析と誤用分析を通して、中国人学習者の日本語受身文学習における問題点を究明することである。研究の意義は、中国における日本語受身文の誤用形態を究明し、誤用の成因を分析することにより、最終的に教育実践の理論的な枠組みを構築することである。

本論文は序論、本論の三部分と結論という五大部分からなる。序論では、まず、誤用、誤用研究についての概念や研究理論、先行研究などを分析し、それから、日本語受身文の誤用先行研究、及びその問題点について論じた。最後に、本研究の内容、対象、方法などを紹介したうえで、本研究の誤用調査で用いる四種の誤用分類法を説明した。本論では、日本語受身助動詞の誤用分析、日本語受身動詞の使用分析、日本語受身構造の誤用分析に分けて、それぞれの誤用の分布状況を調査し、学習歴別の調査と総合の調査を合わせて、誤用の実態とその成因を分析した。結論では、全体のまとめをしてから、誤用対策として、中国人学習者を対象とする日本語受身文の教育について、学習難点、学習順序、学習指導などの面から論じた。

本研究を通して、次のようなことが明確になった。

二分類法では、日本語受身助動詞の誤用は、不使用と過剰使用に二分され、それぞれほぼ半々分布していることが分かった。日本語受身の不使用と過剰使用の問題はともに大事なことである。四分類法では、受身の欠用と贅用という助動詞の単純不使用と過剰添加使用が75%存在しており、動詞の誤用なども含まれている受身の誤用(非用と謬用)は全体の25%くらい存在することが分かった。動詞が正用の日本語受身誤用文が四分の三を占め、助動詞の誤用は中国人日本語学習者受身学習における最大の問題点ではあるが、動詞の誤用も含まれる日本語受身誤用文が四分の一であるため、動詞の誤用問題も大きい。八分類法では、助動詞のみの受身誤用文、動詞の誤用も含まれる受身誤用文はそれぞれ全体の三分の一を占め、さらに受身構造に関わる問題が含まれる受身誤用文は三分の一くらいを占めることが分かった。受身構造に関わる問題は、動詞の誤用と同じ量で存在しているため、問題になっている。結局、日本語受身誤用文では、助動詞の誤用が一番の問題であるとはいえ、動詞の誤用、受身構造の誤用もそれぞれ三分の一の割合で助動詞の誤用と併存しているため、動詞の誤用、受身構造の誤用も無視できない。ただし、動詞の誤用には、自他動詞の誤用と意味用法の誤選択の問題の両方が見られるが、前者は受身誤用との関連性が強く、問題のある部分である。後者は受身の誤用とは言葉によりその関連性がまちまちである。型分類法では、中日受身文の型の対応関係を比較したうえで、受身の不使用文を対象に、中国人学習者の日本語受身文の誤用の型類

型を調査した。結局、対応する部分の誤用は少なく、対応しない部分の誤用は多いことを証明できた。さらに、対照研究を参考にし、誤用研究を基本にして、学習の困難点をまとめた。

日本語受身文の誤用は母語からの負の転移によるものが中心であることが証明できた。母語からの負の転移とはいえ、結局中日言語文化間の差異によるものである。主に次のような要素が考えられる。1. 中日受身文の概念などの文節の相違によるものである。それにより、受身文の意味的相違が大きくなる。日本語の受身の意味範囲は遥かに広い。2. 視点の相違による主語や動作主への制限が違ってくる。3. 日本語には自他動詞の存在による動詞への制限が考えられる。4. ヴォイスの中日表現の相違により、受身表現と他の表現の誤用や混用が多く現れる。

以上のことを踏まえ、中国人学習者を対象とする日本語受身文の教育について考える。

学習者主体を日本語教育の理念とする。学習者にとっての問題点や日本語の受身用法の使用頻度などを統合的に考慮したうえで、教える内容、範囲、順序などを工夫することが大事なことである。日本語受身の分類法は日本語の学校文法をそのままになっていることが問題である。それはそれを直接学習内容と学習順序になって、その内容に沿って教えるようになっており、外国語として日本語の特徴性が欠けている。日本人である母語話者向けの文法説明や分類法では、外国人学習者には不適切なものである。特に、学習者の母語や自国の文化などを考慮に入れなければならない。一つの文法項目に対して、学習重点や学習順序を区別せずに、用法を究極的に網羅し一斉に勉強させることは、学習者を主体とする考え方ではないと考える。

日本語受身文の四大分類から、誤用の多い群と少ない群に分けて、四つの型群に分類する。1. AA文を直接対象型と間接対象型と二分する。直接対象型ではAA物理的動作、AA心理的作用、AA相手型と三部分に分ける。間接対象型はAA持ち主型とAAはた迷惑型の二種類に分ける。2. AI文は心理・生理的状態型であるが、直接対象型、直接事態型、間接事態型と三種類に分ける。3. I文を事態実現型と事態状態型に二分する。事態実現型はI物理的作用とI心理的作用の二部分になる。事態状態型はI超時的事態型、I社会的慣習型、I存在型と三部分に分ける。4. II文をII現象受身型とII関係型に二分する。

学習順序を次のようにまとめてみた。1. 最初の導入は、日本語受身文の直接対象型があるAA文、AI文、II文を中心とする。具体的には、AA文の物理的動作にあるAA生理的変化型、AA強制使役型、AA接触型、AA催促型、AI文の直接対象型、II文の現象受身型である。2. 次の段階では、AA文の物理的動作の残りの型、AI文の直接事態型、I文の事態実現型である。その中で、特に、I結果型、I実行型、I表示型を重点にして注意を払う。3. 第三段階は、AAの間接対象型、AI文の間接事態型の学習である。4.

第四段階として、AA文の心理的作用の受身型、I文の心理的作用の受身型の学習段階である。5. 第五段階はAA文の相手型、II文の関係型をそれぞれ取り入れる。その中で、特にAA相手への発話型、II論理的关系型を重点にして注意を払う。

日本語受身文を、その性質や意味特徴などにより、影響型、関係型、事態型と大きく三種類に分ける。さらに、影響型を直接影響型と間接影響型に分ける。相手型は相手関係であるAA関係型と対象関係であるII関係型に分ける。事態型は事態実現型と事態状態型に分ける。直接影響型にある物理的動作は中国語の受動と一致しているところがあるため、誤用の問題は少ない。それ以外の型は、中国語との対応がないため、誤用の問題が最も多く、誤用が集中している部分となる。つまり、影響関係の直接影響関係にある心理的作用の全て、間接影響型の全て、関係型の全て、事態型の全てが誤用を産出しやすい部分である。学習の重点もここに置かなければならない。

以上の日本語受身文の分類から、日本語受身文の学習指導を考えた。

外国語としての異文化学習である日本語受身の学習は、国語とする同一文化内の学習とは、学習内容や順序や、学習の難点と重点が異ってくる。よって、文化認知的差異、言語表現的差異、言語要素的差異などから、学習ポイントを抑えた、それらの要素による誤用をなくすための特別な指導が必要となる。

指導内容は、次の三点が基本である。1. 視点中心の学習指導。日本語受身文の話者性、関係性、事態性を強調する。2. 動詞の学習指導。動作動詞と結果動詞の区別や、自動詞と他動詞の区別をする。3. 言語表現の学習指導。

話者性については、主語が有情者であるAA文とAI文を中心とする。また、II文の擬人法的用法もAA文同じように取り扱う。主語が有情者の場合は、動作主が有情者と非情物の二種類に分けて考える。それと同時に、主語と動作主の配列関係にも注意を払わなければならない。配列関係は話者中心であるため、主語は話者との関係が一番近い、動作主は主語に次ぐ関係でなければならない。また、文脈により、主語の統一性も働くため、話者の立場による受身文もあると考えられる。関係性については、AA相手型とII関係型は話者性を顕著に表している受身型だと考えられる。中国語では、関係性を表す場合は、能動文を用いる傾向があるため、特に、II文の場合は主語が非情物であるため、日本語と異なり、受動文にならず、能動文で表現するのが一般的である。事態性については、事態性を強調するI文は、非情物の主語に視点を置き、事態はどうなっているかという事態の状態や結果を表す文であるため、影響性を文の焦点としない。I文は中国語の意味上の受動文と相当するため、受身の不使用が顕著になる。

最後に、今後の研究課題として、本研究の内容と関連する六大課題を提示した。